

第16回よろなか塾 2011年11月3日(木)

文学と私

講師 新人作家
伊藤 香織 氏

・プロフィール:

佐伯市弥生江良、1975年生まれ、36歳。日本文理大付属特別進学コース卒。早稲田大学人間科学科卒業後、読売新聞社に入社。新聞記者を経て、佐伯に帰郷、文筆活動に入る。

2010年、第40回九州芸術祭文学賞最優賞を受賞。受賞作「苔やはらかに」は東京で働いていた30代の独身女性が心身の体調を崩して帰郷。身近な人たちとの交流を通して回復していく姿を大分県南の方言を使って描いた小説。

郷土佐伯市に在住の、新進気鋭の作家。



・教頭先生の言葉

子どものころは、音楽が大好きで、ピアノで作曲をしたりしましたが、本を読むというのは、むしろ苦手な子どもでした。

今考えると、すごく考えるということが好きでした。自分という存在が不思議でならない。自分の体や両親が気づいたときから当たり前ものとして与えられているということが不思議でした。それを不思議に思っている人はいないようで、同年代の人達が楽しく遊んでいるのを見て、これって私だけ？というような違和感がずっとありました。また、宇宙とか世界の始まりや成り立ちがすごく不思議で仕様がないうのがあって、考えるのが好きということにつながったように思います。

本はろくに読まないのに、小学生の時は書くのが好きでした。私の作文を読んだ教頭先生(久松先生)が、「伊藤さんには、書く才能があると思うから、これを磨くように担任に言っときました」というのを、後で伝え聞いて、すごく嬉しかったのをよく覚えています。今でも有り難く思いますし、子ども時代にほめられたことって、最初は勘違いであってもやっぱりすごく大事なことなんだろうなと思います。

今まで漠然と自分が考えてきたようなことが、大学に入ると、哲学とか文学の分野では、何百年もみんながずっと考えてきたことなんだと分かって、それからは本も読めるように努力し、実際それらを学ぶようになりました。

自分もちゃんと読んで書きたいと思うような気持ちになり、大学時代から本格的に小説類を書くようになりました。

でも納得できるようなものができないまま、就職活動に入り、英字新聞会に所属していた関係から、取材して記事にし、社会に影響を与えるという仕事に魅力を感じて新聞記者を志望しました。

9.11のテロなどの大きな事件を、新聞記者の時に経験しました。自分たちが作った記事が、翌日大きな一面にばーっと広がっているのを見て震えを感じました。その経験は、小説を書く上で、今役立っていると思います。

・文学とは

夕焼けの空がとってもきれいで、子ども達がその中に向かって走って行くのを後ろから眺めて影になるのを見た瞬間とか、朝起きて里芋の葉っぱに朝露がきれいに転がるのを見た時とか、寝たきりの身内がいたとして、自分が庭にいて、その人の笑い声がふっと聞こえたりする、それがはっきり聞こえたりするような瞬間。日常に、そういう心をちょっと動かされる瞬間があると思うんですが、そういうのに気づくってというのが文学の最初の種ではないかと思っています。誰でもそういうのにちょっと気づいたら、そこにはもう文学の種があると思います。

何か壮大な物語とか、ミステリーのあらすじを思いつくというのだけが文学ではないように思います。

だから、皆さんが毎日の生活の中で何か気づくということがあるとしたら、それは本当に文学の種だと思うので、特別なものではなく文学を身近なものとして感じて欲しいです。

・言葉に表せないもの

文学とか音楽というのがどうして生まれて、人類の歴史上消えることがなかったかということ、最初は本当に表現することそのものに喜びがあったからこそ、始まったと思うんですが、文学は言葉で表現することに喜びがあったからだと思います。

小説というのは言葉で表現するものですが、同時に言葉にはどうしても表せないものや感覚があるということも、表現者は知っておかなければならないと感じています。

小林秀雄が、中学生か高校生に、語りかけた『美を求める心』という講演のなかでいみじくも言っています。

「言葉の邪魔の入らぬ花の美しい感じをそのまま持ち続け花を黙って見続けていれば花は諸君にかつて見たこともなかったような美しさをそれこそ限りなく明かすでしょう」と。

大人になると、これはスマレの花だとすぐ分かりますよね、ああスマレかって思ってしまう。するとすごく繊細な紫の色とか、それがどんな感じに咲いていたかとか、もうそこまでは見ないで、ただスマレということで流してしまう。だけど、子どもは言葉にとらわれない分、感性が強く、びっくりするような詩が書けるんですね。

・「純文学」と「大衆文芸」

一口で文学といっても色々なジャンルがあり、有名な賞であっても厳密には違いがよく分からないということがあると思います。例えば、芥川賞は「純文学」の短編作品対象で、新人作家に与えられます。同時に発表される直木賞は、長編の「大衆文芸」作品対象で、主に中堅作家に与えられます。

では、「純文学」とは何かということ、私は、言葉を使った芸術だと捉えています。

ミステリーだと、宮部みゆきさんや松本清張さん

などが好きという人が多いのですが、そういう人たちが、例えば芥川賞の作品を読んだ時には、全然面白くないと言われるんですね。何のストーリーもなくてつまらなかったって。私自身が、純文学の雑誌とされている文学界からデビューしたので、純文学作家ということになると思うんですけど、ハラハラドキドキというものは、根本的に面白さの度合いが違うんです。

当たり前に見ていた世界がまるで別のもののように思える、言葉を使って世界をこんな風に表現できるのか、という視点を持つと、ミステリーや恋愛小説というものは、感動の種類が違うということが分かっていたかと思います。

あんまり事件や出来事に頼らないで一文一文大事に読み、読む楽しさを味わってもらってという小説を自分は書いていきたいと思っています。

・志賀直哉

志賀直哉がなぜ文章がうまいかっていうと、文章が簡潔で分かりやすいからと教えられてきたんです。『網走まで』という短編でも、すごいなと思ったんですけど、ただの紙なのにこの本から、ざわめきが聞こえると思ったんですね。

いろんな人物がそれぞればらばらの動きをしているのに表現が的確っていうか、駅のホームで鈴が鳴ったり色んな音や動きがありますが、まさにそういう情景をその場で見ているような雰囲気伝わってくるんです。だから、小説の神様って言われるんだな、と。それはやっぱり自分が書くようになってよく分かるようになったと思います。

・人間中心じゃなくて

例えば、愛し合っている二人がいて、この人を失ったら世界が終わってしまうみたいな世界が恋愛小説にはあると思うんですが、私の性格かも知れませんが、その傍にダイヤモンドみたいなきれいな蜘蛛の巣が張っていたりすると、こっちの方が気になっちゃうことがあります。そもそもこの世界は人間だけで構成されてはいないわけですよ。

宮沢賢治の詩や小説では、鳥や鉱物が話し出したり、それぞれ思考をもっていたり、人間中心じゃないんですね。

『カンバーセッションピース』の保坂和志さんの作品にも、亡くなった身内が住んでいた家にいると、昔、皆で笑い合ったりした声が、もう皆いないのにふいに聞こえたりする。そして、その昔の記憶というのは自分にではなく建物の方に刻まれているんじゃないか、などと思う箇所があります。実際、私たちにもそんな不思議な感覚が体で分かる場面ってあるんじゃないかと思います。

・国木田独步

『武蔵野』という小説、これは文学史では本当に重要な小説なんですけども、読んだら分かるんですが、人物が殆ど出てこないんですね。武蔵野の風景

がずーっと描写されているだけなんですけど、なぜか本当に読んでいて心地がいいんです。

『忘れ得ぬ人々』では、阿蘇山を旅行した時に会った修行していた僧の姿とか、佐伯で漁師が網を見事に投げている風景を見て、一言も言葉を交わしていないけども自分の中で永遠に焼き付いている人の存在のことを、忘れ得ぬ人と書いています。私もこのように、人間を自然や風景の一部として描くことに強い関心があります。

・点と点をつなぐ

亡くなったスティーブ・ジョブズが「点と点をつなぐ」という話を卒業式のスピーチでしていました。私も大学で学んだこととか、新聞記者でやったこととか、小説で落選したこととか辛く厳しいことも色々あったのですが、一生懸命やっても、その時はこれが一体何になるんだろうと、全然分からなかったことがたくさんあります。

まるで関係ないように思っていた一つひとつの点、出来事が、後になって振り返って見るとつながっていたのかと分かる。ムダはなかったことがあって、なるほどと思いました。それはその時々で全力を尽くすからこそつながっていくのだと思います。

自分の信じた道に一心不乱に邁進することは、作家であれば特に必要だと思います。芸術家の信念は時として世間の常識からズレることもあるかもしれませんが、尊敬する先人たち同様、私も気にせず進もうと思っています。

・成長曲線について

私たちはこれまで、コツコツ頑張れば少しずつでも成長すると教えられてきましたよね。でも、多くの人がある程度頑張ってもなかなか伸びず手ごたえを感じられなければ、自分は向いていない、と早々諦めてしまう。

でも、1万時間の法則という言葉もあるくらいですが、ある心理学の本によると、人間は、努力を継続していったる数量に到達すると、成長の線が少しずつではなく、急激に上昇に向かうといいます。成長はそんな風に起こるようです。それは、文学でも分かる気がします。受験勉強でも、ものすごく本気でやった時って、突然全部が分かったような瞬間があると思うんですね。だから、やっぱり向いていないと簡単に諦めず、もうちょっと頑張ったらその臨界点に手が届くかもしれないと信じることです。それが支えになると思います。

・最後に

今日お話しした作家の作品とかももし機会がありましたら、ちょっとずつでもいいので読んでいって文学って楽しいなってことが分かっていたら本望です。

自分もまた引き続きもうちょっと頑張って、佐伯のことも調べて書いたりしたいと思います。

今日は、ありがとうございました。